

A vibrant field of purple flowers, likely lavender, with lush green foliage. The flowers are arranged in vertical spikes, creating a rhythmic pattern across the frame. The background is a soft-focus expanse of similar flowers, extending to the horizon.

パープル

第43号

高村昌憲 個人誌

# 目次

---

パープル 第43号 目次

高村昌憲・個人誌 <Takamura Masanori : Kojin-shi>

## 詩

シューベルトの風	高村昌憲 (2)
サラダ会	高村昌憲 (2)
自由な肉体	高村昌憲 (3)

## 翻訳詩

アラン『ガブリエル詩集』 (十)	高村昌憲 訳
朝にて	(6)
ソネット	(7)
冬	(8)
感謝	(9)
あなた	(10)
ガブリエルの『魅惑』について	(11)

## 評論

初期プロポ断想(二十六)	高村昌憲
1 友人たちの正義	(12)
2 作家たちの自由	(13)
3 速い生活	(14)
4 十三日の金曜日	(15)

編集後記	(16)
------	------

<表紙の写真は、ブルーサルビア（サルビア・ファリナセア）の花々である。>

## シューベルトの風

高 村 昌 憲

北へ行った台風は温帯低気圧へ  
色々と名前が変わっても風は吹く  
動き回る生活からアンダンテへ  
コスモス畑に響き始めた弦楽四重奏曲

大海へ流れ出る恋に汚れた淡水  
暖かい上昇気流に巻き上げられる  
青春のダムに堰き止められていた音階  
久しく停滞していた〈イ短調〉が鳴る

## サラダ会

高 村 昌 憲

銅と亜鉛の金属が高熱で混合される一瞬  
残酷なメルティング・ポットの中の真鍮  
自己を失ったまま目標の合金になった青春  
痩せて若かった私たちは誰もが偽りの連中

老いて目標が無用になった懐かしい顔と顔  
お互いの味を消さない集まりの名はサラダ会  
お互いの色も消さない野菜の色は赤と白と青  
沢山食べ過ぎても害にならない和やかな集い



## 自由な肉体

高 村 昌 憲

戦うことになれば誰でも夢中になるのに  
自分だけが英雄になれると錯覚していた時代  
いつでも現実ばかりを見詰めていたのに  
未来を捨てるばかりで拾った記憶が無い

十二歳から二十二歳までラケットを握り  
戦いなら何でも経験したつもりになっていた  
動物になったようにテニスコートを走り回り  
勝敗という結果を当てにして徒に日々を送った

それでも鍛えた肉体だけは丈夫だったから  
給料取りに必要な真夜中の仕事も付き合いも  
人並みに熟してゲームセットまでやったから  
今は負けるが勝ちを知り尽くす気が置けない友

プチッ！ という音を聞いたように思った瞬間  
しまった！ しまった！ 筋肉に高電圧が走った  
痛い！ 痛い！ 右足ふくらはぎの筋肉が切断  
準備体操不足が招いた初めての肉離れだった

人と人とは別れる時は悲しく心が痛むように  
筋肉と筋肉が別れる時も激しい痛みを苦しむのだ  
一度別れると孤独の倦怠に沈む時間は長く辛いのに  
再会出来る日に蘇る自由な肉体が希望になるのだ

アラン 『ガブリエル詩集』 高村昌憲訳

## 1 朝にて

---

### 朝にて

幸せな安らぎの中で あなたの朝は大変に長く  
温和な熱情にすべてを放擲し  
あなたは鹿毛色の薄明かりで金色の睫毛を瞬き  
優しく触れた大切な人の秘められた思い出

それは頭から離れず 過ぎた時間を戻して  
あなたは奇妙な色の両眼をして陽気に微笑む  
大変に美しく優雅な優しさがあなたから離れ  
軽い痛みがあなたを狙っている

それは身をかがめ 躊躇し 両手を広げ  
あなたは無駄な麻布の中で鹿毛色の財産から両足まで  
彼女が生きた人生のすべての領域を測定する

あなたはより曲がりくねり ゆっくりと追いかけて  
幾つもの穴へ逃げ込んだ波を突然に受入れて  
あなたは風に愛撫される海のように笑う

## 2 ソネット

---

### ソネット

あなたは大人しく同意する美しい壺だった  
その朝 もうすっかり潮の香りがするそよ風  
やわらかそうな水蒸気を発散している海は  
あなたの魅惑的な白い曲線を濡らしていた

青い大空に浮かぶ蒼白い月のように  
霧が立ちこめる谷間を愛撫する一条の光  
ヴェールをすっかり脱いだあなたが如何に美しくても  
あなたは愛する幸せな男にすべてを捧げた

海水の白い泡と調和のとれた曲線  
笑っている波の 回るうねりと渦  
窪地を流れる海流の海藻への口づけ

沢山の藻が漂っている所に欲望は広がり  
透明な岩場の下で 古代の泥土に洗われる  
長い時間をかけて生きた私の真珠が光っていた

(L・Gの詩集のために 一九二九年十二月十三日)



冬

蒼白い曙の月と真珠色の朝の光  
あなたの静謐な帰宅に私は運命に従う  
寒さと白い星と霧氷の輝きを  
あなたは既に見ていた 私はその時幸せに  
生きていた 一年の長さはあなたの静かな足跡  
あなたの顔は穏やかな気候の中で変わる  
最も優しい人のことを私の心に告げていた  
私の存在は熱く力強いものに取り巻かれていた  
私の視線が思い出させるのは夜に光る真珠  
心地よい巣 隠れ家 少しの退屈  
磁力を帯びたあなたの光る両眼の中で死んでいる  
おゝ美しい人よ！ あなたの指の予言は空しい  
あなたは無頓着な男の未来を告げる

あゝ！ その星は風土という塔をやっと造った  
私の朝はあなたの夜になる あなたは月で  
私たちの霧氷の上に傾き 枝でできたレースを通して  
あなたは彼方の雪山の頂を見る  
そこに敷かれている絨毯は足跡を消し  
白い沈黙が守っているのは彼らの夢  
すべてが眠る 巨大な都市とストライキの波  
それはあなたの心の中の苦悩が打ち勝つリズム  
嘲笑的な呟きがここで目覚める時  
黒鷲が枝を横切りながら白い女性の下着が  
雲の切れ端に落としたまま忘れられている

おゝ眠る人の肩の上で忘却する純真さ  
月明かりの下の夜の雪よりも白く  
その唇と あなたの乳房は 余りに若い

しかしながら恐らく蒼白い照明の光線は  
眠る女性に触れ　そして閉じた両眼の上に  
愛された思い出と　眠らせるための策略と  
魅力的な欺瞞を半分ほど蘇らせ  
溜息が温かい曲線の波を回転させ  
琥珀と　焚かれた香によって良い匂いの穴を回す

翼のある夢と混じり合う愛人たちに暗黙の同意を与え  
このはるか彼方の詩から何か予感されるものがある！

あるいは少なくとも私が愛するその予感に眩くのだ

(L・G・Lのために　一九二九年十二月二十日)

### 感謝

私はあなたと同じものを 暗闇の穴から知る  
夢中にさせる匂い そこには秘密の熱情が眠り  
大変に若くて自由なその肩の下に あなたから隔たって  
あなたを臣下にしたがる心配を捨て  
敬意を示して あなたの大切な思い出に従う  
甘い夢があなたの輝かしい未来に打ち勝った  
苔の生えた洞窟の中の秘密の愛撫  
あなたの姿がはっきりしない日に生まれた時  
あなたの柔らかな暖かい愛されている曲線の体が  
良い香りがする波が 溜息の中や  
交錯された夢を思い出させようとしている時  
すべては心のままに 愛撫を受けて横たわり  
ある朝 睫毛はカールされて微笑している

私の薔薇よ 私は大変に長いこの過去を知る  
退屈の空しさと 不在の罨は  
高価なエキスのあなたを疲れさせた  
気を付けろ！

しかしあなたの笑いは挑発的だった  
あなたは横になり ミルク色の腕を貞淑な優しさと  
警戒心を隠しながらその襷を私に広げる  
赤毛の乱れた髪に私の唇は手間取る  
ここでは懐疑と残酷な予感消え失せている  
あなたで一杯だ 私は息をしてあなたの塩分を味わう！

そして私は あなたの姿と結びついた私の姿の中で  
幸福そうに広がって流れる海藻のように眠る

あなた

あなたの睫毛の下を滑るなめらかな視線は  
時には危険を楽しむ鋼鉄になる  
でもあなたは海で憔悴させ溺れさせる術を知っている  
如何なる策略もあなたの繊細な鼻は嗅ぎつける  
あなたは興奮しても真直ぐに目的に向って歩く  
あなたの魂は心を閉ざして安心して  
あなたの手の中は際立った優美さを語っている  
微笑みを知っているが 説明することはなく  
あなたの足跡は一步一步が迅速で乾いていて  
あなたの若い肉体には秘密の力があると皆が言い  
魂はその肉体と関係していても そんなに心配せずに  
確かなことは幸福が大変優しく揺れている  
でも愛撫された夢から出た柔らかな水蒸気は  
時々少しばかり深い火山の火によって赤くなる  
首の動きと相手に返す台詞の声と  
脅迫される背の高さと逃げ去る愛  
すべてが深い夜に後ずさりして混じり  
大変にゆっくりと就寝するあなたの睫毛に悪知恵が入り  
あなたの隠された力に男性的な企みが入る

しかしあなたの愛人は その存在を委ねた時間を  
よく知っていたことを思い出して微笑み 裸体を見せる

大空の幸福の下を飛ぶような魂  
鹿毛色の輝きで明らかになったあなたの顔  
そしてあなたは支柱に巻きついたしなやかな茎  
二つの青い花のように吊るされている青い瞳

ガブリエルの『魅惑』について

水の流れに沿ってナルシスは草の姿になる  
それはあなただ！ その誓いは大事で華麗で  
日々と機会を乗り越えるために  
事故や感情さえも彫刻するために  
固定された純粹なあなたの姿そのものに従う  
絶対的な円としての神はあなたの思考を思い  
退屈という結び目を解いて不安に溺れるのはあなた  
毅然とした夜に陶醉しながら 物思いに沈んだ  
岩を拒否しているその波を選択するのはあなた  
放浪好きなあなたの魂を最初の一步に戻して  
そしてその流れを細くするのは植物本体  
不可思議な溺死者は瀕死の事態を変え  
大理石の法則や冷たい立像に対峙して  
銀色の河の中から生まれたものが殺すのは  
光の渦と変わりやすく反射する像！  
このようにあなたは不完全な愛が流れるのを見る  
あなた自身は留まって 別人になることを拒否する  
おゝ流れるナルシスよ けれども私が愛するのはあなた  
おゝ私たちの堅実だった日々をそのまま写す姿よ  
おゝ各々の事物を迂回する堅固だったものを嘲笑し  
異様なカオスでできたプリズムを通して  
拒否しているゼノンにヘラクレスの姿を与えている  
それが私が見たもので 捻じ曲がる大河を写して  
あなたは不動の岩になって河辺で思考している

## 1 友人たちの正義

人間嫌いの人は、物事を見る時必ず二面性があるということに中々納得しないで、自分の見方や考え方だけが真実であり、それ以外は認めようとしめない傾向があるようです。取分け、利害が絡んで来ると自分にとっての利益が齎す見方や考え方は、より一層他人の利益や自分の損害に与しないものに同調して行きます。自分にとっての利益が〈正義〉に変身します。強国が主張することが正義であるように、社会的地位の高い人が主張することは正義であると錯覚します。それが正義でなくて不正であっても、「お金持ちや権力者や名誉を得た人間」になれば、罰せられていないこともあり得る、とアランは一九〇八年三月六日のプロポを書き始めます。

「不幸なことにも、不正は何時も罰せられていないと認めなければならない。市場で不正が広がっていることは大変良くあることだ。その同じ不正により正義が無視されている間に、お金持ちや権力者や名誉を得た人間になることも大変良くあることだ。少なくとも、正義が与える内面的喜びも斟酌しなければならないし、それは何か自分を満足させるものであり、不安にさせるものでもある。そこには不正には決して分からない感情がある」と言うモラリストの言葉をアランは書いていますが、不正は何処にでもあるでしょうし、何時の時代にもあるでしょう。孔子や老子を生んだ中国でも、現代では役人の不正が蔓延しているらしいとのこと。権力を持つ者や実力のある者はルールに縛られないで自由に行動すべきでありルールを守るのは弱い人間である、という考えがあるとのこと。私は、弱肉強食の動物の世界を連想して仕舞います。社会のあらゆる面で強者が優遇されるのであるなら、まさに悪しき進化論の再現を予想して仕舞います。あるいは病人という弱者を救済する医学というものを軽視する考え方に、私は思考の未熟さを痛感します。

弱者がいるから強者がいるのであり、強者が生まれれば弱者も生まれます。両者は比較したり競争することによって生まれます。強くなければ満足しない者、勝たなければ充実しない者の考え方は、何時までも本当の満足感や充実感を味わい続けることが出来ません。何故なら他者に必ず勝つ必要があるなら、その他者は限りなく存在するからです。それは進歩ではなく向上でもありません。徒な功名心の捌け口に終わる可能性が高い虚栄心の表れでしかない場合が多いでしょう。救いは連帯感によって生まれる仲間意識への興奮が育む高揚感でしょうが、満足感や充実感は少なく、やがて孤独であることを実感することになります。何故なら人間は独りであるからです。真の満足感や充実感、集団から離れて自分自身に還る時に生まれます。独りであることを実感する時に真の楽しみに気付きます。真の喜びを手に入れます。そして美しい孤独を手に入れることによって、他者との美しい関係が光輝いて来ます。そのためには先ず独りの感情を訓練しなければなりません。何故なら二人の感情というものではなく、三人の感情もないからです。正確に言うなら、集団に感情というものはこの世に存在しないからです。

感情を訓練するのは独りです。従って独りで表現する者は、感情を抑制しなければなりません。そうしなければ美しいものになりません。感情には三段階があるとアランは『定義集』の「情動 (ÉMOTION)」などにも書いています。最も動物的で一時的な感情を〈情動〉として、喜び、笑い、恐怖、怒りを表します。それらの記憶を可能にする継続した一連の感情は〈情熱 (PASSION)〉として、愛、野心、吝嗇、恨み辛み、敬意などを表します。そして、最も高次の感情が〈情操 (SENTIMENT)〉です。最も美しい感情であり、まさに人間が人間として必要な感情が情操です。定められた音を表すことによって美しい音楽を奏でることが出来ます。ルールを無視する者に美は宿りません。つまり不正を働く者に美は宿りません。美しいものは正しいものである、とアランは言っています。

「美しい詩句は、それによって表現されている思想も正しいに違いないとわれわれに告げる」(森有正訳)とアランは『定義集』の中の「美しさ (BEAU)」にも書いています。従って、美しい感情も正しいに違いありません。情動でもなく情熱でもない感情です。まさに美しい感情とは情操です。愛でも野心でも吝嗇でも恨み辛みでも敬意でもないのです。愛するだけでは美しくないのです。尊敬する心も美しくありません。愛したり尊敬したりすることによって、自らの感情がモラリストとして守るべき正義を手に入れた時から美しくなるのであり、自らの感情を情操に高めることが可能になるのです。その様な感情の周りには自然と人々も集まります。その集まりは、恐怖や利害のために集まるものではなくて、美しい音楽を聴いたり、美しい絵画を鑑賞したり、美しい文学を知るために集まるのです。そして、正直で自然な感情そのものが魅力となっている主宰者たちの情操に自らを高めようとし、アランはモラリストの言葉を借りて次のように書いて、このプロポを終えています、「.....例えば嘘をつく嘘つきは決して信じられない。そして、もしも全世界の人々が何時も嘘をついていたとしても、最早誰も騙されている訳にはいかないのだ。それ故に正義には何時も友人たちがおり、信じられない位に誠実で率直である」。

勿論、友人たちのいる〈誠実で率直である〉正義の感情は、情動や情熱に止まらず、情操へと訓練された人の感情であることに間違いないのです。

(完)

### 2 作家の自由

作家が表現することは、自分の思考や思想を搾り出すように外部へ押し出すことであると言われていています。それが創作になるのであり、模倣や転写と異なります。後者には基本的にお手本がありますが、前者にはそれが無いことが条件になるのは必定と思われます。その結果、前者には当然のことながら、何を表現しても良いとする自由がなければなりません。しかし自由であっても、自らその自由を規制して行くことも多く見受けられます。

嘗ての詩作には、押韻やソネット（十四行詩）のように色々な決まり事がありました。音楽にも和音やソナタ形式などのような決まり事があり、絵画にも構図や遠近法などの決まり事がありました。ところが現代詩や現代音楽や現代絵画は、これらの決まり事を全て放棄して、あらゆる自由を表現しようとする〈運動〉のように見えます。〈運動〉であるなら、違う運動もある筈ですが、この運動は変わることのない流れとなって大海へ注ぎ込み、あらゆる流れを包含しているようにも見えます。つまり伝統的な決まり事を削りに削って最小化したために、新たに自ら固有の決まり事を構築する才能が必要となりました。そして更に、自分自身で設けた決まり事の本質について説明する能力も必要になりました。説明するためには散文が最も分かり易いですから、言葉を駆使する能力も必要になって来ます。因みに、ボードレーは優れた美術批評家であり、『パリの憂鬱』のような散文詩も創りました。ランボーも、詩集『イルユミナシオン』に見るように多くの散文詩や定型詩を破壊して散文を行分けしたかのような自由詩を創り出しました。ベートーヴェンの後期の弦楽四重奏曲には現代音楽を予感させ嚆矢となるような旋律があり、セザンヌにはサント・ヴィクトワール山や静物を描いた現代絵画の萌芽的作品が沢山あります。いずれもそれらの作品については自らの言葉にしろ、自らの多くの作品を通した他者からの言葉にしろ、作品を完成させる必然性や決まり事への説明が求められました。現代芸術においては、天才は天才である所以を説明する必要がありました。自分で自分なりの固有の決まり事を作っていくのですから当然の分析であり、天才であれば自然な作業でもありました。

ところが天才でない人が天才の真似をした結果、駄作ばかりの山が至る所に出来上がりました。もっとも、駄作だけなら生活を豊かにする楽しみとしてまだ救いはあります。しかし、自らの人生に名誉や財産が手に入れば、自らを天才と錯覚して仕舞う中世の領主のような精神の人が棲息して仕舞います。この様な反動的な人は一度名誉や財産を失えば最早天才でなくなり、不幸な人生の山ばかりが増えて行くこととなります。

「文明社会には精気と若い才能ある人々が不足している。あなた（若い才能ある作家）の本は感嘆され愛され読まれることだろう。あなたは結婚して、それなりにお金持ちになるだろう。冬になればエジプトで暮らし、春にはロンドンだ。若者たちはあなたのネクタイやチョッキを真似て身に付けるだろう。...（中略）...先ずは実践せよ。さすれば信仰はやって来る。信仰に値する



敬意を全て良く理解するには、強くなる訓練をしなければならない。あなたは伝統とヒエラルキー（階級制度）を正しく判断する地位にいない。まずは蜂蜜の味をみることだ。そうすれば、あなたは蜜蜂を愛するようになるだろう。やらなければならないことが分かったなら、良く生きることは良く考えることに通じているだろう。それは大臣以上の歴史になり、アカデミー会員全員の歴史だ」とフランスの文壇で高い地位に就いていたアカデミー会員の老作家が若い作家に忠告していた会話の内容を、アランはその儘一九〇八年三月九日のプロポに書きました。思考する前に行動することは、幸福になる方法でもあります。〈まずは蜂蜜の味をみること〉が、幸福を味わうことになります。そのためには老作家の忠告を受け入れることにあるのですが、それなりに不自由もある訳です。〈首輪〉を付けた犬のように生きねばなりません。

例えば、太陽を緑色に描いた絵を認めようとしなかった明治時代の画壇に、フランスの絵画を観てきた高村光太郎は猛然と抵抗して、有名なエッセイ「緑色の太陽」を書きました。所謂、地方色（日本らしい色）ばかりを意識して描けば、「芸術の墮落が芽を吹いて来る」と批判しています。日本人が油絵を描けば、自然に日本人らしい油絵になるのであって、英国人が描けば英国人らしい油絵になるのである、と高村光太郎は言っています。つまり描きたいように描かなくなって紅蓮の太陽を描き、老作家の忠告に従ってばかりいたり、冬のエジプトや春のロンドンで暮らすことばかり考えて描けば、芸術は墮落するのでしょうか。そんな風にならないためには、狼になって緑色の太陽を描くことです。絶対的な自由を手に入れている狼になって、真の現代芸術家になることです。狼は、首輪を付けた犬に言います、「「繋がっているのか。それでは行きたい処へ走って行けないのか」。狼は嬉しそうに跳ね回り、消えて行きました」と書いて、アランはこのプロポを結んでいます。

狼は、決して狼らしさを表そうとしません。只、自由なだけです。〈嬉しそうに跳ね回り、消えて行く〉処があるのです。首輪を付けていなければ自分らしさを表せない、と思っている犬と全く反対です。確かに、犬には名誉と財産があるのですが、〈行きたい処〉もなく、〈嬉しそうに跳ね回る〉ことが出来ないのです。真の幸福が犬に訪れることはないでしょう。何故なら、幸福とは意識したり考えることではなく、そうする前に行動することにあるからです。老作家のことも、エジプトもロンドンのことも考えないで自由に行動することにあるからです。そこに芸術の真の喜びがあります。そこに人間として生きる真の楽しみがあります。喜びや楽しみを様々な側面から説明することです。それ程充実した作業はありません。そこに現代芸術の神髄があります。

(完)

### 3 速い生活

現代の基本的な間違いは、あらゆることに速さを求めていることにあると思います、とアランは一九〇八年三月十七日のプロポを書き始めています。出勤前の時間は、労働者にとってまさに戦場と同じです。敵に後れを取れば敗戦につながりますから、何事も必死で急いで行います。それではここでの敵とは何でしょうか。それは時間です。定時に出勤出来なければ遅刻ですから、労働者にとっての敗戦を意味します。そして、遅刻しないで済んだとしても、ペンで書くのは遅いですからタイプライターを使い、手紙で知らせるのでは遅いですから電話で大声を出して話をします。速い生活が求められます。

しかし、速い生活には多くの見えなくなるものがあります。活字や写真になった事物の概略しか見ていません。事物そのものを見ようとしません。何故なら事物そのものよりも、事物のサイズとか色とか到着日とか、〈概略〉しか必要でないからです。蜜蜂のように活発に活動しますが、やることは何時も同じ行為であり、花と巣を往復するだけです。思考するにも、〈準備された回路〉で走って思考します。従って、この世界が如何に作られているのかも分かりません。「通りを閉じ込めている丘々は青い靄に包み込まれて」いることも、「水溜まりが、ダイヤモンドのように光輝いて」いることも知りません。速い生活は経済状態を良くすることがあっても、「蜜蜂の愚かな行動へ、直ぐに導かれていくこと」になるのですから、本物の事物も人間も見えていません。本物の季節は決して速く進みません。ゆっくりと規則正しく進みます。それに反して「弾丸のように唸って目的地に向かって行く蜜蜂人間の彼らに、何が見えていたのでしょうか」とアランは質問しています。経済効果を追求する余り、人間の本質を見失う危険を、アランは次のように書いています。

「(蜜蜂人間の) 彼らの眼は、もう事物を見ていません。彼らは、新聞や本の中に書かれている事物の概略しか見ていません。人間たちは世界を丸薬にして飲み込み、科学を錠剤にして飲み込むのです。最早話をしませんし、暗誦もしません。言葉は貨幣のように打たれ、同じ様に流通します。熟考しようと思う者も、食料品屋のカatalogを捲ったりしないで、小麦を葡萄酒に物々交換したいと思えるくらい子供のように見えます。準備された回路で私たちは走って考えます。もしも人間的生活を生きたいのなら、もしもこの世界が如何に作られているのかを知りたいのなら、乞食のような生活をしなければならないだろうと私(アラン)は思うことが良くあります」。

〈乞食のような生活〉とは、時間に追われなくて、本物の事物をじっくりと見ることであり、本当の人間とじっくりと話をすることです。一方的で自分に都合の良い側面だけで見るのではなく、相手から何を貰えるのかを理解することです。乞食は、自分が何を与えるのではなく、相手が何かを呉れるのを待ち続けます。つまり世界が提供するものを受容する容器を所有することが、世界を理解する方法になります。まさに乞食が行うことですが、乞食は決して速く走りません

。自然を受け入れ、世界を受け入れます。

それとは反対に、物を売る人は売りながら走り回ります。その方が売れるからです。ここに販売の奥義があります。買手が考え込むと、売れる物も売れなくなります。考え込まないように速い行動が求められます。商品も手許になければなりません。従って商品も速く仕入れなければなりません。そして出来る限りの経費を節約します。その方が儲かるからです。利益のことが頭から離れませんから、自然を見る暇もなく、世界を抽象して金額だけで表そうとします。相対の世界なら理解しますが、絶対の世界を見ようとしなくなります。売手と買手の関係から離れられず、自己と他者と比べることから生じる喜びに専念します。競争の原理に基づく思考を目指します。売上げを伸ばすためにあらゆる創意工夫を尽くしますから、売上金額という数字の世界しか見えなくなり、事物そのもの人間そのものは無用になります。実利的目標が次から次に現れて、そこを目指して没頭します。事物の移動は速くなり、人間の思考も効率性ばかりを重視して来ます。目標達成に不必要なものは削除されて、無駄をなくした速い生活に埋没して行きます。確かに、一瞬一瞬の生き甲斐はあるのですが、幸福を感じることはありません。何故なら幸福とは、幸福を感じる感情のことであり、速い生活にはこの感情が置いてきぼりにされているからです。真実は論理のみによって把握されるものではなく、事物そのものを味わい、人間そのものに接することによって理解されます。苺の味は、実際に苺そのものを食べてみないと分かりません。けちと噂されていた人が、付き合っただけで仲良くなれば実に気前が良いのに驚嘆することも良くあります。抽象された記号や数字で思考しないことです。〈準備された回路〉で走って思考しないことです。じっくりと本物を見て正しく思考することです。そのためには即断即決せずに、同一の事物と人間を、時間を置いて再度見ることです。真実を理解するためには必要な方法です。因みに、旅先で曇った日に見た海の風景は、晴れた翌日に見ると全く別の風景に見えることは良くあります。それでも二つの風景は同一のもので、それが真実なのです。人々は同じものを幾つも見ると余裕が必要で、そこから速い生活には不可能だった、真の理解を待たざる思考が生まれるのは確かなようです。真実には余裕が必要です。

(完)

### 4 十三日の金曜日

一九〇八年三月十三日は金曜日とのことでした。この日は、カトリック教徒が多いフランスでは、旅行や結婚式や取引の契約を避けるようです。でも宝籤を買いに走った人もおりました。何故なら、十三日と金曜日という二つの不吉が重なったことは、賭けをする人々には有利と見えただからです、とアランは一九〇八年三月二四日のプロポを書き始めています。

我が国にも、縁起が悪いから、という理由で旅行や結婚式などを敬遠する人々もおります。〈四〉は〈死〉を連想させる数字であるから、やはり縁起が悪いと言って嫌う人々もいるようです。そんなことを本気に信じている訳ではないのですが、やはり気になって〈四〉を避けようとする人も多いのではないのでしょうか。あるいは古代中国の陰陽五行説や、暦注の六輝（先勝、友引、先負、仏滅、大安、赤口）などの影響を受ける場合も多いようです。実際に、仏滅の日には結婚式場は休日になり、友引の日には斎場がお休みになるのですから、この様な習慣の全てが社会生活と無関係になっている訳でもありません。でも仏滅に結婚すると本当に不幸になるのでしょうか。友引には茶毘に付してはいけないのでしょうか。それらは本当に、生きている者に関係してくるのでしょうか。誰も明確に答えられないのですが、社会生活の面からそのように決定されているかの如き営みを行っているのですから、それに従った行動を取るしかなくなってきます。

本心を言うなら、殆どの人々は仏滅や友引が真の原因になり得ると思っていない。しかし、そう思わなくても未来を予想することについて、「自分の考えを支えとして事に当たれる強い人は非常に少ない」とアランは言います。十三日の金曜日についても、「素直に無視出来ますが、それでもそのことを考えると或る種の不安を感じます。それを齎すのは私たちの希望であり恐怖心ですが、それらは理性の働きよりも寧ろ観念の連合によって多くが規定されます。その上、私たちに決して苦痛を与えなかった人物が、私たちの記憶と不吉な出来事に結びつくと、悲しい出来事として理解するばかりです。如何なる理性も、この感情のメカニズムに対抗出来ません。私（アラン）は記憶が現れるのを妨げることが出来ません。記憶を取り除くことが出来ませんし、悲しい出来事の時のマントは記憶を思い起こします」。迷信についても同じであるとアランは言います。

迷信がどんなに下らないとしても、「悪い前兆であると言われると、その様な場合と悪いことが同時に起きる可能性を考えざるを得ません。しかし、私は反抗します。私はこの不条理で馬鹿らしい関係を打破したいのです。力強くそのことを考えることが、正しい行いです。従って私は強固になって関係を断ち切りたいのです」。そのためには盲信したりしないで、注意力を働かせて習慣的に行っていることを、もっと強くなって思考して行く理性と論理の道をもっと深く掘り下げることです、とアランは書いています。注意力を働かせることです。良く見て思考すること

です。

食卓が十三人にならないようにしたい人は、現在の陰気なイメージを追い払うことばかり考えているのであり、来たるべき不幸を避けることは思考しない人です。十三人になれば不幸になるから、十三人にならないように考えることは既に間違った考えであると言わねばならない筈です。しかし、「間違った考えでも力を持つことが出来るのであり、考えが間違っていると解っている人でも事情は同じです」と書いて、アランはこのプロポを結んでいます。

間違った考えであると解っていても、人々はその考えが無力でないのを知っています。何故なら、不吉な思いを感じているからです。悲しい気持ちになっているからです。しかし、不吉な思いや悲しい気持ちを自分の力で克服しない限り、間違った考えを間違いであると言えない生活に埋没して仕舞います。それはやがて裸の王様を生む社会へ向かい、赤信号を皆で渡れば怖くない行動をとる生活になるかもしれません。従って、まずは注意力を働かせて、良く見て思考することです。

そもそも十三日の金曜日は何故不吉なのでしょう。それは、イエス・キリストが十字架につけられて処刑された日であるからとされています。それでは注意深く聖書を読んで見ましょう。「マタイによる福音書」「マルコによる福音書」「ルカによる福音書」「ヨハネによる福音書」のいずれを読んでも、明確に〈十三日の金曜日〉と書かれていません。間接的にその日が金曜日であったらと推測することが可能だけです。つまり「三日後に復活する」とイエスが言っていたために、安息日（日曜日）が終わって週の初めの日（月曜日）にマグダラのマリアがイエスの墓を見て、復活を確認したからだろうと思われます。月曜日から逆算して三日前が金曜日であったと推測出来るだけで、十字架で死んだ日が金曜日と明確に書かれていませんし、まして十三日という日も書かれていません。私は聖書の研究家ではありませんから確かなことは言えませんが、後世の人々が聖書を繙いて、様々な書誌学的研究を通して出てきた俗説の可能性が高いように思われます。勿論、これも私の推論です。しかし、如何なる説も流布されると、それが〈事実〉の如く扱われて〈歴史〉になって行くことは良くあり得ます。そして俗説にしろ、一度流布されると、それを覆すためには膨大な労力をかけて検証するための長い時間が必要になってきます。それこそ新たな証拠が必要になってきますから、極めて困難な作業になります。従って中々修正出来ないために「間違った考えでも力を持つことが出来る」のです。しかし、私たちは注意力を働かせて、良く見て深く思考することが肝心です。そうすれば間違いの原因を発見する可能性が生まれてきます。そして、陰気な感情を生む〈関連性〉が稀薄になってくる筈です。様々な精神の健全性が保持されてきます。十三日の金曜日や仏滅の日に結婚しても幸せになれるでしょうし、四の数字も不吉な数字でなくなり、逆に幸運の数字になることもあるでしょう。因みに、我が家の電話番号には四が入っています。自動車のナンバーも四から始まっていますから、何時も十分に注意して運転しようと努めています。

(完)

◆六月十八日（火）に東京・恵比寿の日仏会館ホールで石崎晴己氏の講演「エマニュエル・トッド、その予言力の秘密」を聴講した。エマニュエル・トッド（一九五一～）は、家族システムから出発して独自の社会的歴史的研究において優れた概念を構築している。デビュー作『最後の転落』（一九七六）にてソ連の崩壊を予言し、『帝国以後』（二〇〇二）にて米国の社会システムの崩壊を予兆すると思われるリーマン・ショックを予言したところから、フランスでは〈予言者〉とされているとのことである。それにしても、民主党と共和党のねじれから二〇一四年度予算がなかなか成立しない米国議会が、アルカイダやシリアと共に第三のテロリストと風刺されているのは不気味である。予言とは分析及び推論の正しさを証明するものであるから米国から目が離せないが、トッドは今後の著作にも注目したい学者の一人である。勿論、石崎氏は邦訳の第一人者であり、邦訳書の全てが藤原書店から刊行されている。

◆七月四日（木）に東京・大岡山にある画家・西村計雄（一九〇九～二〇〇〇）のアトリエを櫻井幸子さんの道案内で訪問した。その外に平野実氏と私の妻で画家の高村喜美子を加えて四人で伺ったが、大岡山駅から徒歩で約五分の住宅街の中に建つ瀟洒な西洋風の建物であった。西村画伯の長女である田中育代さんに出迎えて戴き、沢山の作品の解説もして戴いた。一点ずつ各々の作品の画境が語られ、モチーフや画風の必然性が大変良く理解出来たので、恐らく田中さんは膨大な時間を鑑賞に充てて来たのだろうと想像出来た。西村画伯は一九五一年に渡仏して活躍したが、一九七三年に「ヒロシマ」（三〇〇号）を広島平和記念資料館に寄贈している。更に、一九七八年から八七年までに連作「戦争と平和」（三〇〇号の大作二十点）を創作して、沖縄平和祈念堂内の全壁面に展示されている。

◆八月四日（日）に東京・吉祥寺の「永谷SPACE」で開催された「風狂の会」（主宰・北岡善寿氏）にて、詩人・齋藤 志（一九二四～二〇〇六）についての鼎談で私も話をした。外の二人は、北岡善寿氏と齋藤 巖氏（詩人の叔父である画家・齋藤 求氏のご子息）であった。主に、北岡氏は詩人の清廉な人間関係を語り、齋藤氏は親戚の立場から詩人と絵画との思い出を語り、私は詩人の一周忌に刊行された『齋藤 志 詩全集』（土曜美術出版販売）の編集に参画したことについて語った。詩全集の刊行に当たっては「風狂の会」の事務局を担当している、なべくらますみさんと共に齋藤邸の調査に伺った時の思い出があるが、やはり未刊詩篇の全ての作品が発見出来ない儘であったと思われ、今でも心残りである。鼎談の後は生前の詩人と所縁のあった堀口精一郎、鈴木房江、倉田武彦、富永たか子の各諸氏が詩人の思い出などを語り、各人がお気に入りの齋藤詩の朗読を行った。

◆十一月八日（金）に東京・代々木公園前の白寿ホールで演奏された「畠 千春ピアノリサイタル」を鑑賞した。〈ドイツ語の音楽、フランス語の音楽〉という副題がついた演奏会であったように、前半はモーツァルト「ソナタ・トルコ行進曲付き」、ベートーヴェン「ソナタ・作品110」のドイツ音楽であり、後半はドビュッシー、フォーレ、ラヴェルのフランス音楽であった。ご存知のようにドイツとフランスは隣国同士でありながら、普仏戦争や二回の世界大戦などに見るように戦いの歴史であった。そして、近年になってお互いの歴史観を共通にするために同一

内容の教科書を使用したりして、お互いを理解して無益で損害の大きな戦いを回避しようと努力している。我が国も最近、韓国や中国との関係が悪化の一途を辿っているが、やはり交流は重要である。パリを拠点に長年ヨーロッパで演奏活動をしてきた畠さんは、音楽の力で私たちに無益な戦いに気付いて貰おうとしているように思えた。ステージ上では最後まで只管ピアノに向かうのみで一言も言葉として発しなかったが、ドイツとフランスの歴史から学ぶべきものを強烈に示唆している演奏であった。取分け、フランス音楽の美しさは魔法の音となって、聴く者の心に戦いを超えた情操という高度な感情を培っていくようであった。曲目説明で海老澤敏氏が書いているように〈コンサートを閉じるにまことふさわしい〉ドビュッシーの「喜びの島」は、多くの人々に聴いて貰いたい演奏であった。

◆十一月十六日（土）に東京・市ヶ谷の日本棋院本院で開催された「文人碁会（第十三回）」（世話人・三好徹氏、秋山賢司氏、郷原宏氏／協賛・朝日新聞）に参加した。囲碁に覚えのある詩人・小説家など十八名が参加した。スイス方式リーグ戦により午後一時から六時頃まで一人四局位を熟した。私の場合はプロ棋士との対戦も行う機会が出来たため、五局打ったことになる。真剣に勝敗を争っていると流石に、辺りが暗くなる頃には疲労感から憔悴し、当分、碁石を持ちたくない心境になった。やはり気の置けない人と疲れないう程度に和気藹々と一、二局打つのが楽しい。何故なら私は三十六歳の時に、同じ趣味を持ちましょうということで岳父から初めて囲碁を教えて貰って覚えたので、岳父がそうであったように今でも勝ちたい気持ちが稀薄であるからだ。囲碁に関しては今更、上達して勝ちたいという気持ちは殆どないが、それでも打てば楽しいから不思議な遊びである。私の碁は、碁盤の上に黒石と白石で絵を描くようなものである。当日は、それでも四局目の最後の対局でそれに近い碁が打てたので大満足であった。両者ともアゲハマ（取った石）が無い珍しい碁で、結果は私の三目勝ちであったから、尚更、満足感も大きかったようである。因みに、当日の勝敗は二勝二敗であったから、上出来であった。碁は勝敗を忘れて、自分なりに良い手を求めて打っているのが一番楽しいようである。

◆「パール」四四号は二〇一四年五月二一日発行予定である。

高村昌憲 個人誌 『パ〜プル』 第43号

<http://p.booklog.jp/book/78014>

著者：高村昌憲（2013年11月21日発行）

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/78014>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/78014>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ